

大熊一夫の補講：

皆さんの玉稿を拝読していたら、僕の講義は舌足らずだったな、僕のメッセージは十分に届かなかったな、との反省の念にとりつかれました。

そこで改めて皆さんに、

「イタリア精神保健革命を成就させた『決定的と思える出来事』を2つあげなさい」

という試験問題を出したくなりました。

僕の答えは、以下の通りです。

### その1

フランコ・バザーリアは、1968年から69年にかけて、精神病院という名の治療装置の本性を、徹底的に暴く行動に出ました。

彼はゴリツィア県立精神病院（トリエステの隣の県）の院長だったのですが、そこへ国営放送 RAI の記者セルジョ・ザボリを招いて、院内をくまなく撮影させ、「アベルの園」というドキュメンタリー番組にして全国に流しました。アベルは、旧約聖書の最初に登場する「兄が弟を殺す物語」の殺される弟の名です。つまり「アベルの園」とは、社会から抹殺された人々が集められた精神病院を意味します。

因みに、セルジョ・ザボリは後に RAI の会長になり、さらには上院議員に当選して、バザーリアの同志や弟子たちを陰に陽に支えています。

またバザーリアは、当時最高の報道写真家 2 人にも、院内を徹底的に撮影させ（拘束衣姿の患者群、汚れたトイレ等々を撮影させ）、自身が監修者になって写真集をつくり、精神病院が醜い収容所であることを大々的に告発しました。

さらには、「否定された施設」という題名の著書で、精神病院をとことんこき下ろします。これは1年で5万部も売れたそうです。

バザーリアの告発3連発は、精神科医たちから大ブーイングをもらいましたが、若者たちには計り知れない影響を与えました。

当時、学生運動の嵐が世界中に吹き荒れていました。バザーリアは71年からトリエステ県立病院に移るのですが、このバザーリアのもとに若者が大勢集ま

って、獅子奮迅の活躍をしました。なかでも、大学医学部を出たばかりで、精神病院の色に染まっていない研修医たちが、格別の働きをして、これが精神保健革命の原動力になったのです。

日本国民は、まだ精神病院という収容所型治療装置の実態を、十分にわかっているとは言えませんね。

日本の精神病院には、おそらく 10 万人をはるかに超す職員が働いています。この職員たちの幾ばくかが内部告発をしなければ、日本の精神保健に夜明けは来ないだろうと、僕は思っています。

## その 2

しかし、収容所の惨状を暴露するだけでは、まだ、精神病院を廃絶するには至らないでしょう。僕も、1970 年「ルポ・精神病棟」を書いてからの 15 年間、精神病院を無くせるとは思っていませんでした。「地獄の病棟が天国の病棟に変わればいい」なんて、オメデタイことを考えていました。

精神病院を無くすためには、重い精神疾患の人々であろうと、普通の市民として普通に生活できることを、誰かが証明してみせなければなりません。

ベルリンの壁が崩壊するなんて、世界のだれもが思っていなかったのに、1989 年に突如、崩壊しましたね。あれと同じように、誰もが不可能だと思っていたことを可能にして、「これこの通り」と示す必要があるのです。

精神疾患の人々は、もう何百年も昔から、「理解不能な言葉を発し、突拍子もない行動を起こす、治療不可能なアブナイ人々」と思われてきました。患者と一般市民は共存できないものだと、専門家の精神科医も、社会のほとんどの人々も、そう信じてきました。これが、患者が長年にわたって徹底的に蔑まれ隔離収容されてきた背景です。

しかし、1960 年の直前あたりから、この徹底隔離に疑問符をつける精神科医が英国や米国やフランス等に現れました。イタリア精神保健改革の父バザーリアも、そんな一人です。

クロールプロマジンという向精神薬が登場して、精神疾患は医学的にコントロールできる病気（治す薬ではありません！）と考えられるようになりました。また隔離収容が、新たな病気「施設病、施設症候群」を生み出していることが、問題視されるようにもなりました。そして、精神疾患の人々の言葉も、「意味があるのだ」「了解不能ではないのだ」と考える専門家がたくさん現れました。

こうして「精神病院の縮小」と「精神病院外での生活の拡大」が世界のトレンドとなったのです。

でも、バザーリアたちが世界の多くの精神科医たちと決定的に違うのは、「精神病院の縮小」と「精神病院外での生活の拡大」を極限まで推し進めて、精神病院をゼロにしてしまったことです。

精神病院が少しでも残ってしまえば、そこには手にあまる重い患者が集められてしまう、つまり打ち捨てられる人々（人間扱いされない人々）が出てしまいます。

バザーリアやその同志たちは、世界の多くの精神科医と異なって、この“手に余る重い患者”を見捨てるなんて医師として許されないことだと考えました。地域精神保健サービスの実践を通して、「精神病院を使わずに」「重い患者を支える」ことが可能なことを、1975年ころまでに証明しました。ここまで徹底したことで、政治家や政党も納得したから、精神病院を廃絶する法律180号法が国会を通ったのです（1978年）。

現代社会に進歩というものがあるとすれば、それは「排除のない社会」に変わってゆくことではなかろうかと、僕は思っています。

僕は、精神病院を捨てたイタリアに「倫理的な爽快感」を感じた。だから、イタリアにほれ込んだのです。

でも、以上の2項が正解だ、というつもりはありません。皆さんは、もっともっと脳みそをしぼれば、別の素晴らしい答えが見つかるかもしれません。